

英国庭園の謎

有栖川有栖

Alice Arisugawa



N. D. C. 913 244p 18cm

えいこくていえん
英国庭園の謎

一九九七年六月五日 第一刷発行 一九九七年十一月二五日 第四刷発行

KODANSHA NOVELS

定価はカバーに
表示してあります

著者—有栖川有栖

ありすがわありす
© ARISU ARISUGAWA 1997 Printed in Japan

発行者—野間佐和子

発行所—株式会社講談社

東京都文京区音羽二二二二
郵便番号 一一一八〇〇一

編集部〇三・五三九五・三三〇六
販売部〇三・五三九五・三六二六
製作部〇三・五三九五・三六一五

印刷所—大日本印刷株式会社 製本所—和田製本工業株式会社

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にてお取替え致します。
なお、この本についてのお問い合わせは文芸図書第三出版部あてにお願い致します。
本書の無断複写（コピー）は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

江苏工业学院图书馆

藏书章

英国庭園の謎

栖川有栖

ODANSHA NOVELS

講談社
ノベルス

ブックデザイン 熊谷博人
カバーデザイン 辰巳四郎

目次

雨天決行	7
竜胆紅一の疑惑	55
三つの日付	87
完璧な遺書	113
ジャバウオツキ	145
英国庭園の謎	171
あとがき	240

雨天決行

その公園は、西宮市の甲山森林公園の一角にあった。広さは二百平米ばかり。早朝や午前中は散歩を楽しむ人々が木陰のベンチでちよつと足を休め、夕刻から夜にかけては肩を寄せ合つて語らうカップルの姿がちらほら見られた。付近には民家がないので、母親たちが幼い子供を遊ばせにくるような立地ではなく、園内には遊具のたぐいは何も備わっていない。

事件が起きたのは十月三日のことだ。

河野、柏木の二人の巡査が警邏のためその公園に立ち寄るのは、ルーティンのコースではなかった。日中、管理事務所の係員から「シンナー遊びをしたらしい跡を見つけた。高校生らしい男女がよからぬ

遊びをしているのを目撃した、という住民からの通報もあったので、パトロールをして欲しい」という連絡を受けたため、巡回することにしたのだ。当夜、甲山周辺では午後八時頃から雨が降り、十時を過ぎてやんだ。シンナーを手にした悪ガキたちが集まってくるには時間が遅いのではないか、と思われたが、雨があがったのだからと見回ることにした二人の巡査は、自転車にまたがって派出所を出た。

雨上がりの夜更けとあつて、さすがに遊歩道には人影がなかった。カップルも、犬の散歩をさせている者もおらず、木々の葉がそよぐ音の他には何も聞こえない。秋風が心地よい夜だった。

シンナー遊びの痕跡があつたという公園にも誰もいないように見受けられた。しかし、きたついでから、と奥の四阿まで行ってみることにする。童話めいた赤いとんがり屋根の下に、木の切り株を模したテーブルとベンチが二つあるだけのその四阿にも、入口付近から眺めたところ人の姿はなかったの

だが。

自転車を下り、十メートルほど手前まで来たあたりで、巡査らはテーブルの陰から人間の脚が覗いてゐることに気づいて顔を見合わせた。小走りに近寄ってみると、煉瓦色のジャケットを着た女がうつぶせに倒れてゐた。ショートヘアの間に、裂傷らしきものが見える。生きてゐるのか死んでゐるのか、一瞥しただけでは判らなかつた。

「もしもし、あなた。大丈夫？」

河野がそつと肩に手を置いて問いかける。耳を澄まして反応を窺うと、微かなうめき声が聞こえた。まさに虫の息というべきものだった。少しずつ顔がこちらを向き、巡査らを見上げる。

「しっかりしなさい。すぐ救急車を呼ぶからな」

柏木がかけたその声にかぶさって、女の口から意味のある言葉が洩れた。二人の巡査は、はっとして全身を耳にする。

「……許してあげて」

やや厚ぼつたい唇が、なおも酸素を求める金魚のようにはくばくと動いてゐた。

「何やて？」

河野が訊き返す。

「いいから。……私、許すから」

「誰を許すって言うんだ？　こんなことをした奴をか？」

河野が女の顔を覗き込みながら尋ねたが、答えはなかつた。伝えるべきことはもう伝え終えた、というようにがくりと首が折れる。そして、意識が混濁したらしく、すつとその目から光が失われていった。

彼女がいつからここに横たわつてゐたのか判らないが、もう手遅れかもしれない。苦い思いを噛みしめていた、柏木は、はたと首をかしげた。女の顔に見覚えがあるような気がしたので。

翌、十月四日。

私、有栖川有栖は、大学時代からの友人の火村英生とともにその公園にいた。散策を楽しむのが目的ではなく、殺人事件の捜査のため。

四阿のコンクリートの床には、まだチョークで人の形が描かれており、私たちはそこから二十メートルほど離れたベンチに掛けて、兵庫県警捜査一課の樺田警部から事件の概略を聞いていた。

「被害者は、誰に襲われたのか明らかにしないまま息絶えたんですね？」

火村が挟んだ問いに、樺田警部は「そうです」と声優ばりの低い低音で答える。

「二名の巡査にか細い声でふた言告げると、それでこの世に未練はなくなった、とばかりに息を引き取ったんです。救急車が空を飛んできても役には立た

なかったでしょう」

「犯人をかばったわけですか？」

私のつまらない質問には、「そうかもしれません」という慎重な答えが返ってきた。

「被害者は自分の目の前にいるのが警察官だと認識した上で、『こんなことをした人を私は許します。だから、誰が犯人かと追及しないで下さい』と言っていたようではあります。しかし、朦朧としていて自分でも何を言っているのか判っていなかったのかもしれないません」

「犯人をかばったのだとしたら、よほど身近な人物だということになりますね。そして、被害者は『この人に殺されるのなら仕方がない。私にも落ち度があるのだから。許そう』と考えた可能性もある」

「先走るなって」と火村に止められた。「本当はどういうつもりでおっしゃったんですか、と被害者に確認するすべはないんだから」

「それそうや」

私は肩をすくめて黙る。被害者の身边にいた人物についてはこれから警部が説明してくれるのだから、助手はしばらくおとなしくしておこう。助手——というのは、単に火村に同行する口実なのだが……

実は私の職業は「助手」ではなく、推理作家だ。そして、大学時代から十数年来の付き合いになる火村は、京都の私立英都大学で犯罪社会学の講座を持つ助教教授である。私はとりたてて変奇な作風を誇る小説家ではないが、火村の方は研究者としてはかなり変わっている。犯罪の現場や関係者にあたる実地調査を行なうだけでなく、警察の捜査に加わることをフィールドワークとしているのだ。それもただ捜査に立ち会って見学させていただくというのではなく、積極的に真相の究明に挑んで犯罪者に斬り込むというのが彼のやり方だった。そんな火村を、私は「臨床犯罪学者」と呼び、京阪神の警察は実績のある彼が非公式に捜査に参画することを認めていた。

彼は優秀な研究者であり、探偵。妙な才能の持ち主だった。

「被害者の白石七恵について私はほとんど知識がないんですが、敵が大勢いるような女性だったんですか？」

法律学、心理学から法医学まで造詣が深く、語学も堪能な火村助教教授も、売出し中の女性エッセイストのことはまるで知らなかったのだ。

「私も名前を聞いたことがあるという程度だったんですがね」

樺田警部が正直に言う。彼らが白石七恵の本を手にとったことがないのは、ごく自然なことだ。彼女が書くものは、二十代から三十代の女性を対象としたものばかりだったのだから。私だってバステル調のカバーがかかった彼女の著書を読んだことはない。ただ、出版社が送ってくれる小説雑誌に載った短い文章にはちよくちよく目を通してゐる。周辺の諸事を少し斜めから見た辛口気味のエッセイに時に

共感し、時に軽い反発を覚えたりしたものだ。

「随筆家——最近はエッセイストとかコラムニストというんですか？——として、なかなか人氣があつたそうですね。紀行文なども書いていたとか。有栖川さんなら詳しいでしょう？」

「彼女は二十代の前半にスペインで暮らしていたんで、その滞在記を何冊か出してはいますけど、紀行文とは趣が違いますね。現代女性の生き方を考える、といった内容がほとんどです。デビューしたのは二年前で、タイトルは『雨天決行』でした。前を向いて、顎を上げて、雨を衝いて進もう、という積極的なエッセイだったんだそうですが……」

言葉を吞み込む。と、警部が私が思ったのと同じことを口にした。

「『雨天決行』ですか。何となく皮肉な題名ですね。そんな本を書いた当人が雨のさなかに殺されたというのも」

「犯行は雨が降っている最中だったとみてらっしゃ

るんですか？」

火村が四阿の方を見やったまま言う。

「いえいえ」と警部は慌てて打ち消す。

「雨の夜に殺された、と訂正します。——被害者が襲われたのはどうやら雨があがつた後のようです。それというのも、四阿の付近に彼女のものらしい足跡が残っているからです。もし、雨の最中にここにやってきたのなら、そんなものは必ず消えていたはずです」

「被害者の靴の跡なんですね？」

火村が訊く。

「先生にもご検分いただきましょう。女もののパンブスの跡ですが、輪郭もぼやけたものですから、被害者がつけたものだとは断定することはできません。被害者が四阿にやってくるより前に、事件とは無関係の誰かが通り過ぎた痕跡だとも考えられます」

警部が言わんとしていることが理解できた。足跡が白石七恵本人のものだとすれば、彼女が四阿で殺

害されたのは雨があがってからということになる。

また、もしも足跡の主が彼女以外の人物だったとすると、瀕死の白石七恵が倒れていたのがベンチの陰だったとはいえ、その姿が目に入らなかったはずがないから、ただちに助けを呼んだであろう。そうしなかったということは、白石七恵が四阿で受難したのは、その人物が通り過ぎたさらに後だという推論が立つ。だから「被害者が襲われたのはどうやら雨があがった後のようです」というわけだ。

「それにしても……『雨天決行』か。うーん」

警部は腕組みをしてうなる。まだその言葉にひっかかるものを感じているらしかったが、その意味を火村と私が知るのは少し後になってからであった。

「では、ご覧いただきましょうか」

警部はばんと太股を叩いて腰を上げた。紺色の制服の鑑識課員たちが現場から引くタイミングを窺っていたのだろう。四阿のベンチのあたりには、野上部長刑事の姿だけが残っていた。いつもながら、枯

れ木の林に入ったら迷彩服になりそうな地味ないでたちをして立っている。

「足許の悪い中、またまたご苦労様ですな、先生方」

火村と私が近づくと、部長刑事は皮肉っぽい挨拶をした。素人が自分の聖なる職域に侵入してくることに反発を覚えているのだ。彼の気持ちはごく自然なものだろうと想像しているし、毎度のことなので今さらむっとすることもない。むしろ、愛想を振りまかれた日には、気色が悪くてかなわないだろう。

「そこに大切な証拠物件がありますから、注意して下さい。踏まないように」

彼はコンクリートの遊歩道と四阿の間の湿った地面を指差した。証拠物件とは、樺田警部の話に出てきた問題の足跡のことだ。大きなプレートが添えてあるので、指摘されずとも、子供だって不用意に踏み荒らさないのに。

「大切な足跡だと警部から伺ったところです」火村

は屈かんでそれを覗き込む。「靴底もはつきりしませ
んね。これじゃ、被害者が履はいていたものなのかど
うか判断が難しそうだ」

野上は鼻の頭を二本の指でしごいている。

「そう。これでは判りませんわな。雨があがってか
ら女ものの靴を履いた人間がここを歩いたというこ
としか言えない。被害者が歩いてきた跡なのやら、
無関係な通行人が歩いていった跡なのやら」

白石七恵がやってきた跡だとしたら、それはここ
で途切れていて当然だ。しかし、無関係な通行人が
つけた跡だとしたら、その人物——おそらくは女性
——はどこへ去ったのか、と私は付近を見渡してみ
た。と、下の図のようにコンクリートの遊歩道が四
阿を貫いて公園の裏口に続いていることが判った。
もしそんな人物がいたのなら、たまたま四阿の手前
だけに足跡を遺しただけで去っていったのだらう。
「被害者の携帯品などはどんな様子だったんです
か？」

